

日時： 2021年11月17日（金） 18:30~20:00

講師： 野中モモ氏（ライター、翻訳家）

会場： ZOOM ウェビナー

第85回ジェンダーセッションは、ライター・翻訳家の野中モモ氏をお招きし、小さなメディアである「ジン」とフェミニズムの関係についてお話しいただきました。

「ジン」とは、マガジンから派生した言葉であり、「個人または少人数の有志が非営利で発行する、自主的な出版物」だと野中氏は定義します。したがって、日本でもよく目にするミニコミや同人誌、フリーペーパーなどもジンの一種です。一般的な商業出版ルートに乗らないジンは、個人の経験や主張を表明する自主的な「小さなメディア」として存在してきました。「正史」的な見方では、ジンは1930年代のSFのファン集団で最初の盛り上がりを見せ、コピー機などの簡易的な印刷技術の普及を背景に広まったと考えられています。特に自主的な出版物であるジンは、「DIY (Do It Yourself) 精神」を基調とする対抗文化であるパンクと結びつけられてきました。

しかし、こうした見方は、ともするとジンを都会に住む若い同性愛者の白人男性を中心としたサブカルチャーだとみなしてしまう点で問題があると野中氏は指摘します。個人的な「小さなメディア」であるジンは、マイノリティの中のマイノリティが表現する手段としての意義をもつものであり、近年ではパンク文化の中の女性の活動にも光が当てられています。さらに、第三波フェミニズムや草の根のフェミニズムとパンク文化が結びついた「ライオット・ガール」というムーブメントでは、ジンを通して、白人中産階級の女性たちによる主流のフェミニズムとは異なる視点が提示されてもいました。ご講演の中では、女性の同性愛者によるジンである『Teen Fag』や、ボディ・ポジティブを打ち出した『The Adventure of Big Girl』、移民女性を扱った『Bamboo Girl』や、派遣労働者の経験を綴った『Temp Slave』など、様々なアクティビズムと結びついたジンをご紹介くださいました。日本でも、1960年代の安保闘争の中でマスコミに対抗するかたちで様々なミニコミ誌が発行されたように、こうした流れは日本のジン文化にも共通するものだと思います。これらの点から、野中氏は「小さなメディア」であるジンが、所謂アイデンティティ・ポリティクスには還元できないインターセクショナルな視点を開いていくものだと説きます。けれども、その一方でジンは気軽に読み捨てられるものでもあり、ジンがもつ役に立たなさや不謹慎さ、あるいは誰にも見せなくてもいいという個人的で趣味的な要素も重要だといいます。

これまで野中氏は大きな声に乗らずに自主的な発信を続ける人たちの紹介や、間に立つようなお仕事をなさり、ジンの作り手たちの集いも開いてきたそうです。しかし、近年は新型コロナウイルスの影響で集いをもつことが困難となり、新たな交流の方法を模索しているとのことでした。それに対し、本イベントではジンの製作者の方も視聴者として参加されており、そうした方たちからの質問に、野中氏が画面にジンの表紙などを見せながら丁寧にお答えいただく姿は、オンラインでの一つの交流の方法のようにも感じられました。創作意欲を掻き立てるようなご講演をしてくださった野中氏に心よりお礼を申し上げます。

